

語義についての覚え書き : ローマン・インガル デンの見解

著者	瀧内 槇雄
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	5
ページ	83-92
発行年	1981-03
その他のタイトル	Bemerkung uber die Wortbedeutung : Auffassung von Roman Ingarden
URL	http://hdl.handle.net/2241/13819

語義についての覚え書き

——ローマン・インガルデンの見解——

瀧内 慎 雄

あたりまえと言えばこれほどあたりまえのこともないわけだが、文芸作品と言っても、そこに実在するものは文ないし文の多様性しかなく、そしてその文に実在するものは個々の語しかない¹⁾。だから文芸作品の美と言ひ意味と言っても、これを創造し構成しているものは究極的には個々の語以外にない。その意味で文芸作品の意味の問題は個々の語の意味の問題、すなわち語義 Wortbe-deutung の問題に究極においては帰着するとみることもできよう。

たとえばいまここに

「海暮れて鴨の声ほのかに白し」

という完成せる一個の文芸作品が確乎として存在している。だが、と言うべきか、そして、と言うべきか、ここに実在するものは明らかにただ九個の語だけである。すなわち「海」、「暮れ」、「て」、「鴨」、「の」、「声」、「ほのか」、「に」、「白し」。この九個の語がこの作品のアルファにしてオメガであり、この作品の美と意味のすべても、この九個の語の語義(厳密に言えば語義と語音 Wort-laut)が構成するものであり、したがってこの九個の語義のうちに求めるほかない。もちろん私はここで統辞論的要因を無視してこう言うわけではない。私はただ、統辞論の意味と言っても、しばしば言われるように言外や行間などに意味が漂っているわけではなく、当然語が帯びる統辞論の意味なのであるから、それも語の意味の一部、しかもおそらくもっとも重要な部分だろうと考えているだけのことである。

たとえばこの句の「ほのかに白し」の「白し」であるが、これはたんなるホワイトとは似ても似つかぬものであって、この「白し」の意味の美しさ深さは、たといえようもないものがある。句意は「海上もついに暮れた。この広大な闇のなかに鴨の声だけが暮れのこってほのかに白い。」というほどの意味であろう。芭蕉が鴨の色ではなく、声が白いと言っていることに注目させられるのであるが、この深い「白し」の語の意味は、多くの言語学者たちの言うように、「白

し」の語義とは言えず、「白し」の語義はたんなるホワイトに尽きるのであるうか、あるいは尽きねばならないのであろうか。もしそうだと言うなら、この深い「白し」の語の意味を彼等は語義ではなくてなんだと規定し、なんと命名するのであろうか。一方また反対に、多くの文学者たちがおそらく信じたがっているように、この深い「白し」の語の意味も語義と言えるのであろうか。もし語義と言えるとすると、一層もってますます謎は深まり、語義とはそもそもなものなのかとわれわれは問わずにはいられなくなるのである。このような詩的関心を究極の動機として抱きながら、以下、語義の問題について考えていきたい。

1. 機能語あるいは辞

同じく語とは言うものの、語は、とりわけ語義の観点からみて、まったく性質の相異なる二つのグループに分類される。語義の問題を考えていくにあたって、両者はそれぞれ別個に扱わねばならない。この区別は六世紀のラテン文法家プリスキアヌス Priscianus がすでに知っていたものであるが、マルティール Marty²⁾ は、一方を、完全なる表象を喚起し、この表象を通して対象を指示する語と定義して、Kategorematika と命名し、他方を、それ自体では対象を指示する能力をもたない不完全な語であるとし、Synkategorematika と命名した。Synkategorematika はふつう共義語と訳されているので、Kategorematika は自義語と訳していいだろう。Kategorematika には名詞、形容詞、動詞など多くの語が属するが、共義語としては冠詞や „und“ „oder“ „weil“ „wegen“ Kopula の „ist“ 等々の語が挙げられる。日本語から例を求めるなら、たとえば先きの芭蕉の俳句の九個の語のうち、「海」「暮れ」「鴨」「声」「ほのか」「白し」の六語が Kategorematika であり、「て」「の」「に」が共義語である。

共義語は、Synkategorematika という名称がすでに雄弁に物語っているように、Kategorematika に従属し、それ自体で独立には語として機能しえない非自立的な、あまつさえ不完全な語とみなされ、ヨーロッパでは、命名はされたものの近年にいたるまでほとんど研究されることがなかった。共義語の重要性が気づかれ関心をもたれるにいたったのは漸くフッサールの『論理学研究』(1900年)以来のことであり、プフェンダー Pfänder は Synkategorematika という名称を廃し、これを funktionierender Begriff 機能概念と命名し注目した³⁾。すなわち、一方が対象を指示する語(これを彼は「Gegenstandsbegriff

対象概念」と呼んだ)であるのに対し、種々の機能を発揮することをその本来の働きとしている語という意味での命名であろう。

ここでとりわけ興味深く思われるのは、ヨーロッパでは久しく気づかれなかった機能語の重要性が、わが国ではすでに鎌倉末期あるいはおそくとも室町初期の書物と推定されている『手爾葉大概抄』において明確に意識されていたこと、そしてこの思想が宣長および宣長門下の鈴木^{あきら}胤に受け継がれ、両者によって対象概念と機能語とはるかに明快な概念たる詞・辞として把握され、両語種の差異がその本質的語性において洞察されていること、そしてさらに書き加えるなら、この学説が時枝誠記によって発掘され、時枝言語理論として結実したことである。以下、時枝誠記の「国語学史」からの引用によって宣長および胤の学説のあらましを紹介しておこう。

「宣長に従へば、玉緒は玉を貫く緒である(『玉緒』序)。如何に美しき玉も、これを貫く緒によって始めてその美しさを作りあげることが出来る。詞も同様にこれを貫く緒即ち〈てにをは〉によって、乱れることなく、絶えることなく保つことが出来る。…宣長に従へば、詞は衣の布であり、〈てにをは〉はそれを縫う技術であ(る)…換言すれば、宣長は、〈てにをは〉に文を統一体たらしめる重要な機能を認めようとしたのである。…(中略)…」

宣長門下の鈴木胤は、一層これを明瞭にして伝へた。胤は、その著『言語四種論』に、語を体の詞、形状の詞、作用の詞、〈てにをは〉の四種に分ち、〈てにをは〉とその他の三種の詞を対立させて、これを比較して次の如く述べてゐる。今便宜上、表に作ってみると、

【三種の詞】

さす所あり

詞なり

物事をさし顕して詞となり

詞は玉の如く

詞は器物の如く

詞は〈てにをは〉ならでは働かず

【てにをは】

さす所なし

声なり

其の詞につける心の声なり

緒の如し

それを動かす手の如し

詞ならではつく所なし⁴⁾

「心の声」という表現も面白い。胤の表現を近代的・西欧風な表現に言いかえるなら、詞が客体界に属する諸対象を表示する語であるのに対し、辞は言語主体が客体をどのように判断し統合するか、その統覚作用それ自体の表現(心の声)である、ということになろう。一方、文の働きとは判断あるいは統覚にほかならないとみられるので、辞こそ文の構成原理であるとも言えよう。この

ような観点において、辞の機能を「詞に対する総括機能と考え」⁵⁾ 辞と詞の関係を「包むものと包まれるものとの関係」⁶⁾ とみ、辞を根幹とする言語理論を構想したものが時枝文法にはかならないのである。文中における詞相互間の関係を規定し、文の骨組を定めるのが辞であるとみられのであり、その意味で文における辞の重要性は決定的であると言えよう。しかしながら他方において、宣長の玉緒の比喩にはたんなる比喩以上のものがあるのであり、辞は「詞ならではのつく所なきもの」であって、文の「玉」、文の華が詞であることもまた事実なのである。

上に引用した通り、詞を、鈴木胤は体の詞、形状の詞、作用の詞に分類したが、体の詞と形状の詞には、語義の観点においては区別すべき本質時差異は認められず、通常、両者は一括され名辞と呼ばれている。本稿では先ず名辞の語義について、インガルデン Ingarden⁶⁾ の見解を紹介しながら⁷⁾ 考えてみたい。

2. 名辞的語義の三つの要素

名辞的語義はたいてい対象の素材的内容の規定としてのみ理解されることが多い。たとえばいま「机」なる語の語義を手もとの辞書で見ても、広辞苑では

「く机」(1) 飲食の器物をのせる台。食卓。(2) 書を読み、字を書くに用いる台。ふみづくえ。ふづくえ。」

とあり、他の辞書をみてもほとんど同じ記載である。ちなみにドイツの辞書 („Wahrig“) では少しおもむきがちがっていて、

「Tisch: Möbelstück aus waagerechter Platte auf einem oder mehreren Beinen (Eß~, Schreib~)」

とあるが、いずれにせよ、これらはみな対象の素材的・材料的 content の規定であることにはかわりはない。しかしながら名辞的語義が規定するのは対象のたんに材料的内容ばかりとは言えないようである。インガルデンによれば名辞的語義にはつぎの五つの要素が区別されるという。すなわち、

1. 材料的内容 der materiale Inhalt
2. 形式的内容 der formale Inhalt
- (3. 実存論的性格づけの契機)
- (4. 実存論的位置の契機)

5. 志向的方向因子 der intentionale Richtungsfaktor⁹⁾

このうち、実存論的性格づけの契機と実存論的位置の契機というのは、対象の存在様態 *Seinsmodus* と位置の指定のことであるが、これはインガルデン特有の余りに哲学的な関心に発した視点であると言わなければならない。これまでを語義の一要素とみなすことは行きすぎである。それゆえ、この二契機は度外視し(あるいはこの二契機を形式的内容の一部とみなし形式的内容に組み入れることも可能かと思われる)、名辞的語義に 1. 材料的内容、2. 形式的内容、3. 志向的方向因子の三つの要素を区別するのが適当と思われる。

名辞的語義の材料的内容とは対象の品質的性状 *Qualitative Beschaffenheit* を規定する契機のことである。上に述べた通り、ふつう語義と言えどもっぱら対象の品質的性状の規定であって、材料的内容についてはさしあたってはここであらためて特にコメントすべき問題はない。

つぎに名辞的語義の形式的内容について、たとえばいま「家」「建築」「秋」「緑」などの語を例に考えてみよう。そうするとこれらの語が指示する対象は当然その材料的内容が相互にまったく異っているが、しかしそれ以上に、これらの語が指示する対象は、その基本的な存在の型ないし成り立ち方、すなわち形式的構造 *formale Struktur* においてまったく相異っていることに気づく。すなわち「家」という対象は事物 *Ding* という存在の型に属しているし、「建築」という対象は活動 *Tätigkeit* という事物とまったく異った存在の型に属し、「秋」という対象は、これを規定するのはなかなかむづかしいところがあるかもしれないが、状態 *Zustand* という存在の型に属しているとみることができようし、「緑」という対象は特性 *Eigenschaft* という、これまたまったく異った存在の型に属している。対象のもつこのような存在の型ないし形式的構造がインガルデンの言う名辞的語義の形式的内容である。一般に対象の質量 *Materie* に対置してその形式 *Form* を取りだし、これに注目するのは、ギリシア以来のヨーロッパ的思考特有の方法であるとも言え、ここにもその反映をみることはおそらくまちがいでないだろう。しかしインガルデンのように語義を意識が対象を志向的に投企し創造するものととらえるかぎり、先づ対象の形式的構造が投企され、その上で対象の素材的内容が投企されるのでなければ、志向的对象は、その志向性ゆえに存在を確定しえないと考えられるのであって、インガルデンが名辞的語義に形式的内容を認めたのはこの理由にもよると判断されるのである。

このようにして名辞的語義の形式的内容と材料的内容によって対象の形式的

構造と品質的性状が規定されるが、名辭的語義の第三の、そして最終的な機能は、こうしてその形式と質料において確定した対象を、語が表示する対象として指向し指し示す働きである。対象を指向し指し示すこの契機をインガルデンは語義の志向的方向因子 *Richtungsfaktor* と呼ぶ。そして志向的方向因子に単線的 *einstrahlig* な方向因子と複線的 *mehrstrahlig* な方向因子を、そしてさらに現勢的 *aktuell* 恒常的 *Konstant* な方向因子と潜勢的 *potenziell* 可變的 *variabel* な方向因子とを区別する。

前者の区別についてみれば、語義の志向的方向因子が一つの対象を指し示し、方向因子が指し示す方向線が一本のばあいが単線的であり、複数の対象を指し示し方向線が複数本のばあい複線的と呼ばれ、この区別によって単数概念と複数概念の理論的根拠づけがぐわだてられている¹⁰⁾。

後者の区別について、いま „*ein Tisch* 机“ を例にしてみるなら、„*ein Tisch* 机“ は先ず類種概念としての「机」一般を指すばあいがある。このばあい „*ein Tisch* 机“ の語義の志向的方向因子は潜勢的 *potenziell* 可變的 *variabel* である。他方、同じ語たる „*ein Tisch* 机“ が、類種概念としての「机」一般ではなく、個体概念あるいは個物としての「机」を指すばあいもある。たとえば „*Was ist das?* これはなにか。“ という質問に対して、これは „*ein Tisch* 机“ だ、と答えるようなばあいの „*ein Tisch*“ がそれである。このように個別的对象をさすばあい、その名辭的語義の志向的方向因子は現勢的 *aktuell* 恒常的 *konstant* であると言われる¹¹⁾。重要なことはここでインガルデンが個物を指示する語の機能を語義の一要素として積極的に認め、語義のなかにとりこんだことであろう。あらためて後にみるようにフッセルは語義を類種概念、フッセル自身の表現にしたがえば、スペチエス *Spezies* に限定しているのであるが(語義を類種概念とみるのは、語義の一般的理解であろう)、ここでインガルデンは語義をスペチエスとみるフッセルの把握に対して重大な修正——あるいは修正以上のことかもしれない——を導入したことになると思われるのであるが、この問題については次回にあらためて扱いたい。

3. 語義と概念

つぎの問題として、インガルデンは、名辭(イ)「正方形 *Quadrat*」と、複合的名辭(ロ)「等辺直角の平行四辺形 *gleichseitiges, rechtwinkliges Parallelogramm*」、および(ハ)「二本の等しく垂直に交錯する対角線をもつ平行四

辺形」Parallelogramm mit zwei gleichen und senkrechten Diagonalen」を例にとりあげ、この三つの語義の異同あるいは相互の関係を問うている。問題はすなわち、この三つの語義は同じことなのか否か、哲学的言い方をするなら等価 äquivalent なのか否かということである。常識的には、いずれも指示しているものが正方形なのだから、三つの語義は等価であるとみなされるにちがいない。事実「正方形」の語義として(ロ)または(ハ)を挙げている辞書も多いだろう。だが辞書の記載はたいてい語義というより言いかえにすぎないということも見逃してはならないことだろう。

たしかに、正方形であれば、そのものは等辺直角の平行四辺形であるし、また二本の等しく垂直に交錯する対角線をもつ平行四辺形であることに相違のないことは言うまでもない。だがこうしたことはみな存在論的事況に属することであって¹²⁾、たんに事実問題にすぎない。だが語義はたんなる事実問題ではない、とインガルデンはみる。語義において実現され示されるものは、レンズにとらえられるようなたんなる事実ではなく、フッセルの言葉を借りるなら志向的意識に映じたノエマである。つまり語義において問題なのは、たんなる事実以上に、あるいは厳密に言うなら、たんなる事実ではなく、志向的意識が対象をどのように見、どのように把握したか、である。これを要するに、結論を先取りして言ってしまえば、語義とは意識が投企した純粹志向の対象性だということになる。

語義をこのように把握すれば、同一の対象とはいえ、あるものを正方形とみるか、等辺直角の平行四辺形とみるかは、本質的には、赤いとみるか丸いとみるかと同様に、同一対象の別の面に注目した異った見方であり捉え方であって、したがって(イ)(ロ)(ハ)の語義はそれぞれ異っていると言わなければならない。

では、これらの語義は相互にどのような関係にあるのだろうか。私は同一対象の別の面への注目であると書いたが、対象なる語は語義あるいは意識の対象と受けとられる危険が多分にあるし、またむしろそう受けとるのが正当な語法にのっとった理解なので、ここでは対象なる語は避け、インガルデンにしたがい、これを概念 Begriff なる語におきかえたい。そうすると、これら三つの語義は同一概念に属し、同一概念の一面に注目したもの、あるいは同一概念の一面を前面にうちだしたものであると言えよう。インガルデンが正確にも、語義とは概念の一部分の現勢化 Aktualisierung である¹³⁾、と定義したのはこのような意味である。われわれの例で言えば、正方形ということも、等辺直角とい

うことも、平行四辺形であるということも、二本の対角線が等しく垂直に交錯するということ等々も、みな等しく正方形の概念に属し、正方形の概念に含まれていることである。だが「正方形」なる語義に現勢的に含まれているのは、そのうちの一部分の、正方形すなわち真四角であるといることのみであり、その他の成分たる、平行四辺形であることや、対角線が等しく垂直に交錯する等々のことは、「正方形」なる語義には現勢的には含まれていない。ではそれらの成分は語義「正方形」のうちには影も形もないのかと言えば、もちろんそうは言えず、潜勢的にいわば潜んでいるとみることができる。そこでインガルデンは、一概念に含まれているもろもろの部分のうち現勢化された部分を語義の現勢的成分 *akuelles Bestand* と呼び、現勢化されていない部分を潜勢的成分 *potentieller Bestand* と呼んで区別しているのである¹⁴⁾。

インガルデンは「正方形」という彼の論の展開にとって一見好都合と思える名辞をもっぱら例にして論を進めてきたが、これを任意の名辞にかえても——たとえば「海」でも「山」でも「鴨」でも「声」でもなんでもいいのであるが——まったく同じことが言えるはずであろう。というのも名辞に対応するいかなる概念も多かれ少かれ多様性を秘めているからである。「正方形」なる概念は一般の名辞に比べても内蔵する多様性はむしろ少ない方の概念であって、それが例としてとくに選ばれたのは、おそらくただ内蔵せる成分(平行四辺形性とか対角線が等しく垂直に交錯する等々のこと)が分明であって、その摘出が容易だったというそれだけの理由からにちがいないと思われる。したがってインガルデンにしたがい、われわれは一般につきのように定義することができよう。すなわち、いかなる名辞に対応する概念も多かれ少かれ多様な成分を内蔵しているかぎり、これら多様な成分のうち語義として現勢化されるのはその一部、ペイスとなるような基本的な意味であって、他の残余の多様な成分は潜勢者成分として語義のうちにいわば潜んでいる。

ここでとくに注目されることは、当初語義のうちに潜在していたにすぎない潜勢的成分が、語義のうちで現勢化され、語義の現勢的成分に転化する可能性をはらんでいるというインガルデンの指摘であり、こうして語義は無限に豊かになっていく可能性を秘めていると彼がみていることである。この現勢化をよびさますものは、客観的には、それぞれの語が関してきた民族の精神の歴史であり、精神の歴史が培ってきた当該言語の意義体系 *Bedeutungssystem* であろうし(たとえば「水」と „water“, さきの「白し」と „white“ などの所謂語感のちがいは意義体系のちがいである)、来体的にはもちろん、それぞれの

語がそのなかに置かれている文脈であり文体にほかなるまい。文体によって語がどんなに自在に変貌するかは文芸作品に触れるものの等しく経験するところであるが、こうした変化も、語義についてのインガルデンの見解にしたがうことによって、潜勢的成分の現勢化による語義の変化ないし充実として明快に解釈することが可能となるであろう。

以上で私はインガルデンの語義についての見解の概要をほぼ紹介しおえたと思うが、彼の見解のうち、語義の伝統的な理解に対して新たな視点を開くものとして就中とくに興味深く思われる点は、つぎの二点であろう。すなわちその一点は、現勢的恒常的な志向的方向因子という形において、個物を指示する機能を語義の要素として積極的に語義のうちに取りこんだことであって、この結果は語義の一般的把握に対して少なからぬ影響をおよぼさずにはすまされないと思われるのであるが、この点についてはすでに示唆した。もう一つの点は、一般的理解に反して概念と語義とを峻別したことであり、この点にインガルデンの語義に対する見解の独創性があるとともに、その核心もひそんでいると思われる。だが、なぜインガルデンは一般的理解に抗し抵触してまで概念と語義を区別しようとしたのか。概念と語義を区別することによって何を狙っていたのか、ということがわれわれの関心となろう。だがその意図は明白である。もし概念と語義を一般的理解通りに同一だとみれば、語義も概念同様に普遍的客観的なものとなって固定化されてしまう。先きのインガルデンの分析を適用すれば、概念が内蔵するすべての成分は潜勢的・現勢的の区別なしに——あるいは、すべて現勢的成分として、と言っても同じであるが——そのまま語義の成分となろう。それゆえ語義は普遍的客観的となり、語をだれがどこでどう用いようとも語義はかわらないことになる。インガルデンは語義をそういうふうに客観的に固定したもの、動かないものとみる伝統的な見方を斥け、言語主体の働きかけに開かれてあるもの、生動するものとして捉えなおそうとしたと言うことができよう。要するに一言で言えば、インガルデンの意図は語義の普遍性の修正、あるいは強く言って否定にあったのであり、第一の問題点として挙げた個物概念の語義への編入の問題も語義の普遍性の否定という同一の志向のもう一つの現われ方にほかならないと思われる。

ところで、語義を普遍的なものとみる伝統的な語義解釈としてインガルデンの眼前に立ちだかっていた巨大な姿こそ、言うまでもなく、フッセルの『論理学研究』であった。つぎに私は『論理学研究』の語義の把握を検討し、イン

ガルデンがこれといかに対決し、これを修正していったかに焦点を合わせながら、両者の語義観の関係についてみてみたい。

¹⁾ 上演された演劇においては、当然、文と語以外の非言語的な要素も現われるわけだが、これは言語芸術としての文芸作品の特殊な事例であり、度外視することがゆるされよう。

²⁾ Anton Marty (1847-1914). Franz Brentano の弟子。Vgl. „Untersuchungen zur Grundlegung der allgemeinen Grammatik und Sprachphilosophie“ (1908) Bd. I.

³⁾ Vgl. Alexander Pfänder, „Logik“ (1912).

⁴⁾ 時枝誠記『国語学史』114頁～116頁参照。

⁵⁾ 同上、116頁。

⁶⁾ 同上、56頁。

⁷⁾ 以下の語義についての見解の大半は、Roman Ingarden „Das literarische Kunstwerk“ に依拠するものが多く、拙稿の主要な目的もこの紹介にある。

⁸⁾ Roman Ingarden. 1893年ポーランドの Krakau に生れ、数年前同じく Krakau で没した。ドイツ本国の大学で哲学および数学を学んだ。とりわけフッセルから多大の影響を受け、フッセルの高弟の一人に数えられている。Lemberg, Krakau, Warschau 大学の教授として、哲学を講述した。1950年、観念論哲学者の理由によって大学職から追放された。

著書としては、„Über die Stellung der Erkenntnistheorie im System der Philosophie“ (1925年), „Das literarische Kunstwerk“ (1931年), „Vom Erkennen des literarischen Kunstwerkes“ (1937年), „Untersuchungen zur Ontologie der Kunst“ (1962年), „Der Streit um die Existenz der Welt“ (1948年) などがある。

⁹⁾ Vgl. Roman Ingarden, „Das literarische Kunstwerk“, S. 62f.

¹⁰⁾ Vgl. Ebd. S. 64.

¹¹⁾ Vgl. Ebd. S. 64.

¹²⁾ Vgl. Ebd. S. 88.

¹³⁾ Vgl. Ebd. S. 89.

¹⁴⁾ Vgl. Ebd. S. 89.